2009年度 修了

記憶の障害に対するワーキングメモリからのアプローチ
― リーディングスパンテストを用いた事例 ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
大月　智恵

本研究は、言語性の記憶に障害をもつことが推測されたクライアントに対して、言語性のワーキングメモリからのアプローチを行い、その有効性について考察を行ったものである。

この研究に参加したクライアントに対してのこれまでの援助から、クライアントが言語性のワーキングメモリに弱さをもつことが推測された。

そのため、まず研究1としてリーディングスパンテストを実施し、その言語性のワーキングメモリの能力がどのようなものなのかを測定することにした。その結果、クライアントの言語性ワーキングメモリは、同年代の大学生よりも下に位置することが判明した。リーディングスパンテストの結果内容を分析したところ、その要因が3点考えられた。文章の内容を表象化することが苦手であること、基礎レベルの読みの処理ができていないこと、自己モニター機能が脆弱であることである。

研究2において上記の3点の能力の向上に有効だと考えられる課題を実施し、その結果を調べた。課題は、内容の表象化の向上、基礎的な言語処理の向上、自己モニター機能の向上を目的とした3つと、それら課題の成果をはかるためのワード入力を設定した。そして月1回ずつの個人セッションとグループセッションのなかで行うこととなった。全てのセッションを行った結果、ポスト・リーディングスパンテストの得点は上昇していた。また、ワード入力の文字数も上昇していた。

以上の結果から、本研究における、クライアントに対する言語性ワーキングメモリからのアプローチは有効であったと考えられる。